



# (一社)日本エレクトロヒートセンター設立当初の思い出

大森 政市 元東京電力株式会社  
元一般社団法人 日本エレクトロヒートセンター 常任理事

## はじめに

機関誌「エレクトロヒート」が200号を迎えるに当たり、歴史を知る者の一人として、執筆依頼を頂きましたことを光栄に思います。

センター創立から30有余年を経過した今、私も現役を引退して久しく、既に74歳となりましたが、熱く燃えた現役時代がたちまち想起され、協会設立と機関誌誕生のいきさつを、記憶をたどりながら執筆させて頂くことにしました。

## (1) 日本電熱協会の設立

現在の(一社)日本エレクトロヒートセンターは「日本電熱協会」を改称した組織です。その設立は、1983年(昭和58年)8月の事でした。設立に当たって特記すべきことが3つあります。

その第一は、1980年10月にフランスはカンヌで開催された第9回国際電熱工学連合大会(UIE9)に参加したことです。当時東京電力にあって省エネの仕事に従事していた私は、急遽この会議に出席することを命ぜられ、その機会を得ました。当時日本はこの組織のメンバー国であり、日本の組織は「電気加熱技術協会」と呼ばれていました。

参加34カ国、参加者940名のこの大会は、第2次石油危機の真ただ中に開催されたわけですが、参加者は、随所に出てくるPENETRATION OF ELECTRICITY(電力の浸透)という言葉に、電気加熱技術が今後の省エネの切り札であることを確認しあいました。

会議を主導した開催国のフランスは、1973年の第一次石油危機直後に、国家政策として石油から原子力(電力)への一大転換政策を採っていました。その中でフランスが提唱している $\gamma$ 指数の概念は私の心を捉えました。 $\gamma$ が、2.5より大きければ、燃焼プロセスを電力に置換した方が省エネになるというものでした。 $\gamma$ とは、燃焼プロセスを電気加熱プロセスに転換した場合の消費エネルギー比率です。単位は[Mcal/Kwh]です。

そして各種電気加熱技術を駆使したプロセスの実例が列挙され、電気加熱の省エネ性が論じられました。この状況は、機関誌1、2号合併号および拙著「電力による炎の置換」に詳細に記載されていますので、ご参照頂きたいのですが、我が国の省エネ推進の中でUIE9の大会が、当センター誕生の原点になっていることは疑う余地がありません。

第二は前身の「電気加熱技術協会」の存在とこれを組織し支えておられた方々の電気加熱技術発展に対する情熱と真心です。それがなかったら、当センターは存在していなかったでしょう。当時協会は1社最高10万円で20社程度が会員になっていましたが、百田恒夫氏、市川真人先生(初代、2代会長)および中部電力の林正義副社長などが中心になってアーク炉等による系統擾乱(Disturbance)技術を中心に活動しておられましたが、財政に余裕がないために、会議、作業会、国際会議

(おおもり まさいち)